

美しくつかしい、日本をのせて。

# Cradle

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

3

2019 March/April  
TAKE FREE  
NO.52

特集  
この素晴らしき  
ジャズの世界  
庄内憧憬  
儀見博 ジャズ・ドラマー

Cradle 3

美しくつかしい、日本をのせて。  
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2019 March/April  
平成31年3月1日発行(隔月奇数月発行)第9巻4号(通巻52号)

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)会社 出羽庄内地域デザイン 電話0236(64)0888  
制作／Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック・コールドレーショウ」電話0234(41)0012

FIDEA GROUP



酒田市／荒瀬川沿いの桜並木

光る水面に 寄り添う桜並木

 庄内銀行

雨が屋根を叩く音が響き、  
空の色彩が変わっていく窓越しの景色。自然の近くでは、  
音楽がよい影響を受ける大切さを感じます。

## 音楽と庄内 磯見博

高校を卒業後、庄内を離れ東京に暮らし、その後ニューヨークに数年滞在するなどしてジャズに打ち込んできました。そんな私も最近はふるさと庄内で演奏することが多くなり、中でも山奥の旧朝日村大鳥地区での音楽祭は、ジャズやクラシック、ポピュラーなど垣根のない会になっています。会場は、廃校になった小学校を活用した大鳥自然の家。姉の紹介で遊びに行った大鳥在住の彫刻家鳴尾和夫さんの「体育館にピアノがあるからやってみよう！」の一言がきっかけでした。それからもう何年にもなりますが、ある時にはトリオ演奏でピアノソロからベースソロに移った途端、雨が屋根を叩く音が響き渡り、自然の中で演奏している実感に感動しました。

羽黒町の里山情報館での演奏会では、日が暮れ始めて雑木林や空の色彩が変わっていくさまを窓越しに見ながら演奏していると、気持ちが解

放されて、音楽が自然の近くでいい影響を受ける大切さを知りました。また、加茂水族館のクラゲの大水槽の前での演奏は、ゆらゆらと泳ぐクラゲと照明の中で幻想的な世界に持っていわれます。自らベースも弾く奥泉館長が、頑張って水族館にピアノを入れてくれて、音響もとてもいいです。

時間をさかのぼって、私と音楽を結びつけるきっかけを作ってくれた人に、小松章三さんという方がいます。私の中学校の美術の先生で、後に檸檬館という喫茶店を開きました。そこには私のような音楽や美術に興味を持つ若者が集い、その中で長谷川亮さんとも知り合いました。長谷川さんは企画やライブハウスの紹介等を通して、庄内でジャズを広めるきっかけを作ってくれました。また、ニューヨークでお世話になった恩人の日野皓正さんをスペシャルゲストに迎えた、酒田市希望ホール、鶴岡

まちなかキネマ、BAR CHICチャックのコンサートも楽しい思い出です。

一昨年には、首都圏や関西で活躍していたサックス奏者の松本健一さんと廣澤哲さん、ベース奏者の若林美佐さんが庄内に移住し、新しい風をどんどん吹き込んでいてうれしく思っています。ビックリするほど地域に溶け込んで、地元ミュージシャンとも交流し、レッスンも行うなど、盛り上がり何役も買っていると感じます。これから庄内の音楽がどこまでいくのか楽しみです。

庄内は元来、文化的なことに敏感な土地で、その背景には庄内の自然や四季、風土といった環境が、文化的な人間形成につながっていると感じます。庄内の自然、食、そして人は、東京などの友人たちが口をそろえて素晴らしいと言います。間違いなく自慢の故郷です。



加茂水族館「音楽のタペ ～あなたとクラゲと音楽と～」(2018年7月1日)  
写真提供=加茂水族館

いそみ・ひろし/ジャズ・ドリーマー。1952年鶴岡市生まれ。加茂水産高校卒業後、東京都に移住。23才から29才までをニューヨークで過ごし、日野皓正、レジー・ワークマン、ウオーン・マーシユなど、多くの素晴らしいミュージシャンと出会い、セッションや共演を果たす。その後、日本に戻り、植松孝夫、林栄一、本田竹広、峰厚介、大野ერი、金子晴美、向井滋春、佐山雅弘、安田美奈央、鍋島健と共演。2012年には、酒田市希望ホールで日野皓正、増尾好秋、磯見博トリオによるジャズライブを開催するなど、地元でのライブも企画。参加現在は自分のグループを中心に活動中。CDアルバムに、Katsuo Suzuki Trio「Spindrift」がある。



特集

# この素晴らしき ジャズの世界

*What a Wonderful Jazz World.*

What a wonderful world~ とサッチモが歌えば、たちまち素晴らしい世界に変わる。

ただそこにある音を楽しめばいいと、あの声が語りかける。

鼓動に同調し、時に弾み、なだめるメロディーとリズム。

繰り出すアドリブに感情が沸き立ち、「今ここは音楽のある場所だ」と喜びに満たされる。

人が音を欲して生まれたジャズ。

庄内で聴こえる音は、どんな素晴らしい世界に連れて行ってくれるだろう。

特集  
この素晴らしい  
ジャズの世界

やがて時代はカラオケが登場し、生バンドが演奏する場がなくなっていった中で、皆さんはどのように音楽活動を続けてきたのでしょうか。「私は『ジュエルルーム』という店のピアニストと長く組んで演奏してい



KIYOO SATO

HIROYUKI ARICHI

KIYOO UMEKI

佐藤 清夫さん  
鶴岡市在住。地元でジャズ隆盛の時代に、多くのバンドでの演奏経験を持つ。長年のパートナーであるベーシストの山田修さんとのカルテットで活動。

有地 裕之さん  
鶴岡市在住。クラシックを経て、現在は庄内でも数少ないジャズピアニストに。加茂水族館の奥泉和也館長(Ba)、長澤利博さん(Ds)のトリオで活動中。

梅木 清夫さん  
酒田市在住。大学生時代からジャズのほか幅広い音楽ジャンルのギター奏者として活動。現在は「梅野秀平バンド」「今タクオ Modal Soul」でベースも担当。

「お客さんの前ではジャズをやってもウケないので、リクエストされたら、経験を積んだといいます。つけては演奏ができるお店に飛び込んで、経歴を積んだといいます。お客さんの前ではジャズをやってもウケないので、リクエストされたら、経験を積んだといいます。お客さんの前ではジャズをやってもウケないので、リクエストされたら、経験を積んだといいます。」

歌謡曲なんかをその場で弾く、いわばバックバンドでした。ジャズは時間を見つけて練習していましたね。お二人の少し後輩にあたる有地裕之さんは、お店に生バンドがいた時代の後期を知るお一人です。「オーディションがある店もあって、何度受けても受からない人も見ていました。白ばらで演奏するなんてかっこよくて、憧れがありましたね。」

# 庄内とジャズの音風景

庄内でジャズを奏でてきた多くのプレイヤーたちはどんな場所で、どんなふううに音を鳴らしてきたのでしょうか。1970年代から音楽活動を続けるお三方にお話を伺いました。

ました。彼が亡くなって一時期楽器を置きましたが、やっぱり自分の中にある音を出したい気持ちがあった、もう一度ライブに出るようになりました」と佐藤さん。有地さんは、仕事が休みの日に東京や秋田などに武者修行に行きながら、ジャズピアノを続けてきました。「ジャズ独特のノリやアドリブといったインプロビゼーション(即興演奏)をどうやるのか最初は分からなくて。でも結局言葉と同じなんです。聞いて話す、自分の言葉をつくる練習をすればいいんだと。ジャズは同じ曲をいろいろな人が演奏しています。一つの題材をどう発展させているのか、その聞き方も楽しいと思いますよ。」また梅木さんは、酒田市のミュージックギャラリー「グリーンベイ」を会場に「庄内ジャムセッションの夕べ」を立ち上げ、多くの仲間と音楽で交流してきました。「昔も今も、ジャズに限らず、音楽の鳴っている街にしたいと思っています。ライブは瞬間芸術、プロでもアマチュアでもぜひライブを聴いてほしいですね。」それぞれの場所で、人生の中で、音を奏でていた人たちが集まり、新たな盛り上がりを見せている庄内のジャズシーン。心躍るようなグルーヴが今、生まれ始めています。



東京のライブハウスに出入りしていた頃から多くのミュージシャンと知り合う中で、ジャズピアニストの本田竹広との出会いは、自分がプロのミュージシャンを呼び続ける大きな支えになってきたと思う。1991年に彼のライブを酒田で主催して以来、彼が病に倒れてその後、復帰するまで本当に長い付き合いになった。いつだったか「お前は楽器を持たずに、音楽を聴く側の人間でいてほしい」と言われて、それなら命がけで真剣に音楽を聴いていこう

音楽は、音と音の間を楽しむもの。そのパイプ役であり続けたい



「MUSIC 104」主宰  
佐藤 武さん

本田竹広さんと峰厚介さんのデュオをはじめ、国内外の第一線のミュージシャンを多数招聘。現在は酒田港座とタッグを組み音楽を発信。今年は「ZEK TRIO」などのライブが控えている。

僕は昔から西洋の芸術や文化に憧れがあり、美術学校で西洋画を学びました。後に西洋をより体感すべく渡豪し、美術、語学、音楽の教員として暮らしました。白いキャンバスに絵を描くように、何もないところから創り上げる表現法が好きなので、音楽では即興性のあるジャズとの相性が良いようです。バイオリンは中学生の頃に始めて、京都やオーストラリアでバンド活動をしていました。帰国後もジャズをやるために、自分のバンドを立ち上げました。

音で表現する、真剣に心を通わせ合う。そうして音楽ができることは喜びです。



カラマリフリット バイオリン奏者  
小林 誠さん

ジャズバイオリンユニット「カラマリフリット」のバンドマスター。長く西洋画の教員を務め、現在もバンド活動と並行して、市内の教室で音楽や水彩画、英語の講師を務める。

庄内のジャズシーンはプレイヤーはもちろん、ミュージシャンを招聘しライブを主催する人、ライブの会場を提供する人など、さまざまな人たちによってつくられています。その中の4名にお話を伺いました。

## 特集 この素晴らしき ジャズの世界

# 私とジャズ

これから鶴岡のジャズシーンはもっと面白くなると思います。



BAR ChiC <sup>ショップ</sup> マスター  
鈴木 克人さん

平成7年にシックをオープン。15年前頃から店内でライブを行うようになり、現在は定期的に国内外のミュージシャンのコンサートやジャムセッションを開催している。  
住／鶴岡市本町1丁目8-44  
電／0235-22-4958 営／19:00～3:00  
休／日曜定休

私はもともと音楽を聴くのが好きでしたがジャズは全然詳しくありませんでした。でも15年くらい前、ジャズラウンジを経営していたママに勧められて地元出身のベーシストのライブをしたんです。いろいろなミュージシャンが来るようになって、ライブの頻度も増えてきて。お店でもピアノを購入するなど私自身もジャズを聴くのが好きになりました。偶然なのですがこれは音響がいらいらしく、プレイヤーの方からは演奏している気持ちいいと言われます。

あとお客様のノリが東北人には珍しくラテン系だど（笑）。イベントとしては成立しにくいので8割は持ち出しですが、好きでやっていますからね。

鶴岡のジャズシーンは松本さんたちプロが移住してから変わりました。地元のジャズマンたちが彼らを中心に全体で動き出した感じがすごいです。これからはもっと面白くなるだろうし、ここだけでなく庄内のいろいろな場所でもライブを観られるようになればと思います。加茂水族館でのライブも最高ですよ。



ギタリスト  
齋藤 優作さん

庄内町在住。埼玉の大学を卒業し、平成28年4月に帰郷。家業の米農家に従事しながら「今タクオModal Soul」のギタリストとして音楽活動を進めている。今はまっているのは鬼オキーボーディストAnomalie(アノマリー)。

好きなアーティストたちのルーツにジャズがあることを知ったのがきっかけでした。

ギターを始めた高3の頃はヘヴィメタルにはまっていて、大学では軽音部に入りました。当時はまったくジャズに興味がなかったのですが、毎年2回ほど行く合宿先のロッジにジャズのCDがたくさんあって、次第に聴くようになりました。音楽の趣向もロックからブラックミュージックと変わってきて、その中で好きなプレイヤーたちのルーツにジャズがあると知ったんです。それで自分もジャズを演奏したいと思うようになりました。大学を卒業し、Uターンと同時にジャズギターのスカイプレッスンを始めました。そのうち酒田のジャズリノで梅木清夫さんと出会い、バンドを組むようになり、パー・シックのジャムセッションにも参加するようになりました。最初は難しく考えて悩みましたが、最近は下手なりに楽しむように思えるようになりました。今は作曲にも挑戦しています。ダンスミュージックにも興味が出てきたので、ジャズにとらわれないジャズの表現なども目指しながら、音楽を楽しんでいきたいです。

特集  
この素晴らしい  
ジャズの世界

力強いビートとアコースティックな音色で活躍してきた若林美佐さんが鶴岡に移住したのは、偶然にも松本さんが移住した約1カ月後。六本木でジャズクラブの店長をしていた鶴岡市出身の男性と結婚することになったのがきっかけでした。「知り合った時には主人の帰郷の準備が進んでいたし、私自身ツアーで全国各地に行くことが多いので、住む場所にこだわりはありませんでした」。以来、鶴岡を拠点に東京、仙台、山形、秋田、新潟と各地で音楽活動を展開。プロアマ問わず東北一円に新しい人脈を広げています。

小学生でパーカッションを始めてからずっと演奏を続け、大学卒業後にエレキベースでジャズを弾き始めた若林さん。ウッドベースを勧められたのを機に会社を辞め、プロ活動を始めました。「当時は女性ベシストが珍しかったんでしょね。まだろくに弾けないのに引つ張り上げてくれた方がいて、でもそのせいか自分をプロだと言い切れない時期が長く続きました」。しかしとあるコンサート会場で演奏後に高齢の女性から「女性が演奏していたから最後まで楽しく聴けた」と言われたことが女性ベシストとしての自分の役割を発見することに。ニューヨークの武者修行では「自分の言葉で演奏すること」の大切さを学びました。「このジャズに対する探求は、演奏

をやめるまで続くと思いますね」。そんな若林さんが逗子海岸のカフェで長く開催していたのが、解説付きの演奏会「朝ジャズ」です。難しいと思われがちなジャズの楽しさをわかりやすい解説と共に伝えるこの活動を、今年松本さんと一緒に庄内でも始めたいと話します。「あと庄内は食べ物お酒もおいしいので、国内外のミュージシャンを呼んで、食と組み合わせたジャズフェスみたいな企画もしてみたいですね」。今年4月末には旦那様が飲食店を鶴岡の銀座通りにオープンするため、そこでライブも考案中とのこと。女性目線のジャズイベントが庄内に誕生するのはもうじきかもしれません。

ベーシスト◎若林 美佐さん

大阪生まれ、奈良県育ち。平成15年、ニューヨークに渡米。帰国後は関東に拠点を移し、海外ミュージシャンの招聘も行う。29年5月、鶴岡市に移住。詳しい活動情報は公式HPにて。http://www.misawakabayashi.com/



自分の言葉で語る演奏を  
これからも求め続けて。

Misaki Wakabayashi

即興演奏や、一般的な奏法を逸脱した特殊奏法による演奏などを展開する、梓にはまらないサクソ奏者。そんな松本健一さんが都心から鶴岡市に移住したのは平成29年4月。田舎暮らしを望んでいた奥様に、鶴岡への転職の機会が訪れたことを受けてでした。「素晴らしい自然の中で暮らしが実現しました。ただ移住する前は庄内で演奏する機会はほぼないだろうと思いい、生活を鶴岡で、仕事を東京でと考えていました」。

しかし移住2年目である昨年は、バー・シックでの2カ月に1度のジャムセッション、鶴岡まちなかキネマでの年2回のコンサート、イギリスのカリスマ即興演奏家を招聘した丙

申堂での演奏会、フランスのファンキーなバンドを招聘した酒田と鶴岡でのワークショップ&コンサートと精力的に活動を重ね、庄内に新たな音楽のうねりをもたらしました。「もともと庄内には、音楽に対するエネルギーを抱えている人たちが結構いたんですね。鶴岡市出身のドラマー磯見博さんから紹介された鶴岡のジャズ関係者に会ったら、一気に人脈が広がって、地元ジャズマンたちと演奏するようになりました」。

そんな交流の中で生まれたのが、ツルオカ・ミーティング・ジャズコンサート実行委員会です。松本さんを代表に地元のアマチュア演奏家たち有志で構成された同会は、昨年6

月に鶴岡まちなかキネマで磯見さんや若林美佐さん、廣澤哲さんたちプロを交えたコンサートを開催。それを皮切りに、先述した海外アーティストを招聘した演奏会や山王商店街で第3土曜日に開かれる山王ナイトバザールでのライブなど、活動の幅を広げています。「東京は何でも分業化されているので、友人の多くは同業者です。でも庄内は年齢も職業も関係なく、すぐに横のつながりが生まれます。その分、何でもしないといけなくなるけれど、音楽を楽しむ、愛する人がもつと増えて、いろいろなところで生演奏が聴けるようになるように、これからもさまざまな活動をしていきたいですね」。

テナーサクソ奏者◎松本 健一さん

長崎県生まれ。尺八音楽にも影響を受けた独自のスタイルで国内外の多くの音楽プロジェクトに参加。平成29年4月、鶴岡市に移住。詳しい活動情報は公式HPにて。http://matsuken.starfree.jp/



庄内を生演奏が響く  
地域にしていききたい。

Kenichi Matsumoto

BOSE

**Jazz Rino NIGHT vol.70**

3月9日(土) 酒田市・Jazz Rino  
出演:カラマリフリット、CSJO、佐藤加代子、クインビー

開/18:30開場 19:00開演  
¥/1500円(1ドリンク付き)  
問/0234-24-8550 または 22-2705

**BAR ChiC Jam Session Vo.9**

3月23日(土) BAR ChiC  
セッションに誰でも自由に参加できます。  
聴くだけでも大歓迎。

開/19:00開場 20:00開始  
¥/500円+オーダー  
問/0235-22-4958

**Lush life live**

4月6日(土) 酒田市・ジャズラッシュライブ  
出演: 田山ひろみ(Vo)、山崎弘一(Ba)、  
楠本卓司(Ds)、吉田桂一(P)  
※廣澤哲さんが一部ゲスト出演

開/19:00  
¥/4500円  
問/0234-22-3303

**Jazz Rino NIGHT vol.71**

4月13日(土) 酒田市・Jazz Rino  
出演: 廣澤哲(Ts)、有地裕之(P)、相澤  
マリイ、KAFKA、河野シン、クインビー



Jazz Rino

開/18:30開場 19:00開演  
¥/1500円(1ドリンク付き)  
問/0234-24-8550 または 22-2705

**スイングクレインズジャズオーケストラ  
1st LIVE 2019 With 五十嵐はるみ**

4月21日(日) 鶴岡市日本国 末端技術研  
究所内2階 クレインズルーム

出演:  
[第1部] 五十嵐はるみ(Vo)、折重由美子  
(P)、若林美佐(Ba)

[第2部] 五十嵐はるみwithスイング・クレ  
インズ・ジャズ・オーケストラ

開/17:30開場 18:00開演  
¥/3000円(1ドリンク付き)  
問/0235-23-8381(佐藤管工設備/橋本)

**山王ナイトバザール**

5月~10月の第3土曜日  
鶴岡市山王通り

**MIKAカルテット ジャズコンサート**

5月24日(金) 鶴岡市立加茂水族館  
出演: MIKA(Vo)、二村希一(P)、伊勢  
秀一郎(Tp)、若林美佐(Ba)

開/17:30開場 18:00開演  
¥/入場料:3500円(水族館入館料含む)  
問・予約/090-2995-5334(佐瀬)、  
tohokumusic@yahoo.co.jp

※加茂水族館主催のコンサートではありません



BAR ChiC

**大鳥音楽祭**

6月22日(土) 大鳥自然の家  
世界に向けて表現するアーティストと、人と  
地域が出会う辺境の音楽イベント

出演: 天田透トリオ「Blauberg」、小川紀  
美代(バンドネオン)、夜久(G)、「唯一無  
二の流れ」板垣博信(Elc)・松本健一  
(Ts/尺八)・塩野博紀(Dr)

¥/大人:3000円、高校生:1000円、中  
学生:500円、小学生以下無料  
開演時間など詳細は公式サイトを確認ください  
<http://ootori-musicfestival.strikingly.com/>  
問/090-7757-7491(田口)

**音楽のタベ**

6月22日(土) 鶴岡市立加茂水族館  
出演: 吉野ミユキカルテット...吉野ミユキ  
(As)、外山安樹子(P)、若林美佐(Ba)、  
鈴木麻緒(Ds)

年間スケジュールは加茂水族館の公式サ  
イトを確認ください  
<https://kamo-kurage.jp/event/>

**ツルオカ・ミーティング・ジャズコン  
サート2019**

6月29日(土) 鶴岡まちなかキネマ  
開/18:00開演(予定)  
¥/1500円(予定)  
問/080-6719-4216(松本)

特集  
この素晴らしい  
ジャズの世界

「一音でライブが熱を帯びるような  
廣澤「リマ」哲さんのサクソフォンの音。  
テナーサクソフォンのプロ奏者として、  
過去にはバンド「渋さ知らズ」への  
参加をはじめ数多くのミュージシヤ  
ンと共演、また、ジャズを中心とし  
たライブハウス「なってるハウス」  
を立ち上げ、広く音楽を提供してき  
ました。「もとはフリージャズから  
入って、松本健一君とも一緒にやっ  
ていました。もう20年以上の付き合  
いです」。廣澤さんは7年ほど前か  
ら酒田にライブで訪れ、この地で縁  
あって結婚。移住を決めた矢先、旧  
知の松本さんも鶴岡に移ることが分  
かり、庄内での音楽活動の大きな後  
押しになったといえます。

酒田での生活が始まると、まずは  
ライブができるお店に売り込みを開  
始。やがて地元ミュージシヤンとも  
知り合い、演奏のできる場所が増え  
ていきました。「ただじつはここ10  
年くらいジャズから離れて、タンゴ  
のバンドでサクソフォンを吹いていたん  
です」。廣澤さんは在京時、「リマ  
ンゴ」名義で活動し、本来タンゴに  
はないサクソフォンの音で自分の音楽の  
世界を広げていきました。「東京にい  
る時は、わざわざ俺がジャズをやら  
なくてもいいと思っていましたし、やっ  
ていても何だか嘘っぽい気がして。  
でも場所が変わったら印象が変わり  
ました。スタンダードをやるとお客  
さんが喜んでくれて、何より今、ジャ

ズをやっていることが楽しいんです」。  
庄内での暮らしも3年目に入り、  
最近では酒田でのライブを中心に、ス  
タンダードからフリージャズ、はた  
またタンゴまでさまざまな音を鳴ら  
している廣澤さん。「庄内には長く  
音楽活動が続けてこられた先輩たち  
もいて、移住してきた我々を受け入  
れてくれる土壌がありました。庄内  
に住むことを決めてからずっと考え  
ているのが、ここで世界一のジャズ  
フェスティバルをやる! というこ  
と。世界の演奏家たちが『日本に行  
くなら庄内に行かないか』といわれ  
る場所にしたんです」。廣澤さん  
はその熱い想いをサクソフォンの音に託して、  
庄内で新たな音を奏で始めています。

テナーサクソフォ奏者◎廣澤 哲さん

神奈川県出身。フリージャズ、タンゴの奏者として活動しながら、浅草・合羽橋でライブ  
ハウス「jazz & galleryなってるハウス」を経営。平成29年10月より酒田市在住。



いつか庄内を会場に  
世界一のジャズフェスを。

Tetsu Hirozawa



庄内写真真季行 35 鶴岡市・馬渡

満開の桜の下に群生する  
淡いうす紫の花たち。  
名前を知ったのは最近だった。

モノクロの日が続くとパステル色の  
景色はことのほか嬉しい。私には春に  
とても楽しみにしている風景がある。  
野の隅に群生する淡いうす紫の花であ  
る。最初に出会った時は柿の木の新芽  
の下でふわふわと木を囲むように咲き、

新緑を際立たせていた。それ以来必ず  
その花たちの姿を探すようになった。  
馬渡の桜の大木の下にも咲いていた。  
決して主役にはなれず、桜の花をより  
美しくする花たち。名前を知ったのは  
つい最近のこと。野大根の花だった。





## 梅津菓子舗の からからせんべい

振ると音がすることから名付けられた  
鶴岡の郷土菓子は、かつて子どもたちが  
小銭を手に、飛びついて買っていたことから  
「とびつけ」とも言われていたそう

三角形のせんべいにおもちやが入った「からからせんべい」は、鶴岡を代表する郷土菓子。最も古くから作り続けているのが、旧市街地の路地裏にある梅津菓子舗だ。10代目の梅津善一氏によると、このせんべいは昔、運徳煎餅と呼ばれ、正月の縁起物だったという。その頃のおもちやは鉛の兵隊や土の大黒様、勲章、刀、槍など。紙に包まずそのまま入れていたため、振るとカラカラと音がした。その音をもとに、山形から訪れたある食の評論家が「からからせんべい」と命名。善一氏がまだ子どもだった昭和20年代のことだった。

今では鶴岡名物として珍重されているこのせんべいだが、善一氏いわく、昔は全国各地に同様のものがあつたという。元禄期に江戸で生まれた大黒煎餅が起源という説も。だが時代を経て全国的に姿を消す中、鶴岡では梅津菓子舗が作り続け、戦後、鶴岡の伝統菓子として定着した。さすが、さまざまな文化がそのままの形で保存継承されてきた陸の孤島、庄内地方だ。

小麦粉と黒糖の生地を家宝ともいうべき焼型で丸く焼き、熱々のまま折っておもちやを入れる。その素朴で香ばしいせんべいをバリバリッと食べ進め、中から包み紙を取り出し、開いておもちやを手にする。そのワクワクは、いつの時代もきつと変わらないものだろう。タイムスリップしたような梅津菓子舗にいと、昭和の子どもたちが小銭を握って飛び込んでくる姿が目に見えかぶ。

ちなみにからからせんべいは、作るお店によってせんべいの味わいもおもちやも微妙に異なっている。その違いを楽しむのも、また乙である。



鶴岡市本町にある梅津菓子舗は、からからせんべい、おきつねはん、雛菓子、切さんしょなど鶴岡を代表する郷土菓子の他、のらくろぼうろ、飴、打菓子など、昔ながらの駄菓子もすべて手作りで販売しています。公式サイトではお店や商品の情報の他、お取り寄せ方法についても詳しく記載しています。

<https://umetsukashiho.com/>  
梅津菓子舗 ☎0235-22-7348

(取材・文 長谷川結)



啓翁桜の花

立春を迎える頃、まだ寒い雪国の花屋に「啓翁桜」が並ぶ。枝にたくさんついた蕾が開くと、薄桃色の花びらが一気に春を呼び込む。啓翁桜は、1930年に福岡県久留米市の良永啓太郎が、支那実桜を台木に穂木として小彼岸桜を接いだところ、その枝変わりとして生まれたものに由来するとされる。山形県では全国に先駆けて促成栽培が始まったといわれる。庄内でいち早く栽培を始めた酒田市生石の高橋家の畑を訪ねた。

❌春雪を玉と頂く高嶺かな  
— 野見山朱鳥

よく見ると枝にはたくさん花芽がついている。啓翁桜は静かにその芽を増やしていた。どこよりも早く咲く冬の桜。その畑はまだ雪に覆われていたが、見上げた空は青く、鳥雲の遥か上空には太陽が顔を覗かせていた。鉛色の雲の重さはここにはなかった。頬にあたる東風が足元の氷を解かし始め、春水が光を集め瞬いていた。



啓翁桜の畑の春日

春日遅々の里山  
生石を歩く

雪雲の絶え間から差し込むやわらかな光と、段々と小さくなる残雪に春の兆しを感得する。鬱屈とした鉛色の空からようやく解き放たれ山裾に春探しに足を運んだ。

季語  
春日 (はるひ)  
春の太陽、春の日の光。

庄内俳句紀行

❌啓翁桜鳥海山を木立より

— あべ小萩

葉を落とした啓翁桜に、形の良い枝が何本もまとまって一つの株を作っている。やわらかい日差しが、その影を冬の名残の粗目の雪の上に映し出していた。うさぎの足跡が春へと招き呼ぶように続く。並んだ木立の隙間から、頂を雲で隠した鳥海山の雄大な裾野が広がる。啓翁桜はハウスの中で寒さと暖かさを調節しながら



雪解けと春水

❌水ぐるまひかりやまずよ露の臺

— 木下夕爾

畑から少し離れたところに蕎麦屋がある。その門の萱から伸びる氷柱の雫が、まるで「光の春」の如く落ちて音を奏でる。鮎色の日差しに目を細める猫を、小さな石仏が優しい春の光を喜ぶように微笑む。蕎麦に添えられたばんげ(露の臺)の天ぷらのほろ苦さに、待ちわびた春の訪れを感じた。



萱からの氷柱の雫

❌白鳥帰らむといま高飛翔

— 岸田稚魚

帰り道、白鳥がその姿を青空に眩しく羽ばたかせていた。まもなく北帰行が始まる。中国・前漢時代にまともられた『礼記』の一節「東風解冻 蟄蟲始振 魚上冰 獺祭魚 鴻雁来(東風凍を解き、蟄虫始めて振き、魚氷に上り、獺魚を祭り、鴻雁来る)」の情景を思いめぐらして心躍らす。これから少しずつ季節が進み、染井吉野が咲く前、啓翁桜が満開になる頃にもう一度この畑へ足を運んでみたい。



春日に微笑む石仏

写真・文|| あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)